箱根七湯栞　八

ル 4
1124
8

箱根七湯葉巻之八

蘆の湯部

目録

一湯病並功驗
一芦の湯全図
一笛塚の叓
一土肥河内土肥畑舊地
附古哥古碑木
一湯風呂図
一明礬山ヨリ相摸眺望之図
一家々所持墨跡冩

湯宿六軒

松坂屋万右エ門　伊勢屋清左エ門　大和屋金左エ門
亀屋兵蔵　紀伊國屋忠蔵　吉田屋平左エ門

効験

打身　下疳　五痔　頭痛　疝気　瘡毒
ちらけ　脚気　湿瘡　腕気　淋病　風疾
水虫　田むし　骨痛　腰痛　下冷　忌病

其外中風切疵労疫癩病浴して験をえし

此湯所の地は箱根の山の絶頂にして麓より
ハ林藤よりして三逕あり新道畑宿より瀧坂鉄と
て途狙を登る事廿八丁節代の難所なり又本賀底倉
よりは山つゞきにゆる〳〵一里余さるまでの山坂なし
また箱根権現坂の方より元賓の河原を経て登る

道にして三つのなり入口に頃よりの制札を建つ
ある山氣陰として風わ母のま　硫黄の香甚ハ未
る岩のうへ二子山　駒ヶ嶽　冠ヶ嶽高いわそのより
後へ宝蔵嶽まで湯泉ハ八面前に立ふさかり鄰に波
をうちを東にあり横に近ふて聰のちりを拂ふ浴
室ハ市中にて四壷一株なりこれを例とふ湯宿まて凡
二十ばかりに古き鈴軍書の諸師まぐし物より
ふ自なりしば西南ハ箱根の関伊豆駿河の海濱く
表く東ハ足柄の山に連りて足柄八重山西隣
に公時山もこの中にはりて一洞雲記ひらくハ方て忽ち
くし浴する雨もこの迎までハ箱根路の杉高く
なしされバ須臾にして去柳風にかれく日光
かくしろみて樽ハまさに旁こに烟むして冥冥蒙

もあり常に雲気充満してよるその照日もなかりけり
暑かりけれは此里の雲は同宿の折からおのおの入ひ
出る山の名なしとひなりてこゝを来つゝしなりし風利ゝ
しるし御ほかにかべての雑樹有しよりほころびこそし桜など
八本ぶり柏のたとしありし雅なりし又赤天山の下河辺
この池の邊芝ようき萱所まて表のひきて厳ら草まで
これ菜をとうりせし療宮のうち結を慰むこゝろ
而して芦の湯とはいへるは権現の湖水を芦のうみ
と名つけをのまさかりなれは此名ありとぞ芦の湯
早川の流なり

東鑑

奉寄筥根権現御神領之事

相模国早川本庄

為筥根別當沙汰早可被知行者也

右件於御庄者　前兵衛佐源頼朝為沙汰所

奇進也全以不可有其妨仍為後日沙汰註文書

以申

治承四年十月十六日

斯御まゝ古しへは権現の神領なりしかは小田原

領に属し

東光庵
熊野権現
カメヤ
吉田ヤ平兵エ
あし池
弁天
明礬谷山
笛塚

此坂を湯坂と
いふ元箱根
宮権現への
みちなり
二子山
芦ノ湯達ニノ
七湯本道之
木賀底倉
滝坂より此
道へ来る
達戸湯
大和ヤ金右エ門
いせヤ
キノクニヤ
浴室
カメヤ兵蔵
イセヤ清右エ門
松坂ヤ万右エ門
弁天山

蓮广湯　冷湯なり気体設し

此湯芦の湯の下たつま道大和屋今在屋といへる両宿の
傍にありいにしへハ家も沢山ありて療客集り浴
をせし今ハ湯宿六軒の様となりしハ川くさし
かき屋根して方一間斗の湯曲のところ残れりさし程なし
温泉ハ日夜に涌出して絶ス此湯ハ明礬の湯にて
何ほどの眼病も洗ひてよし此辺の石ハけるゝそこら白
く黄色をおびたり色明ばんの気の薄き所なるべし
蓮广湯と名付るも此眼のやまひなるよりいひならはし
たるなるべし　又此湯を去る事して諸々の眼病を洗ふ
によろしありとて名しかも休息所たてへ相應ありし
よりさし行筒をおかれ作り置けば右の大和屋の店
にて商ふ明礬の絲 并ニ口歯 眼目なとに本草にもみへたり

ゆへに其名を得たりけむ 口痺をさへ及ひ手疵
を治すとぞ 因芦の湯と合ていふ
椿まつの稀名有馬も同洗湯のよしいへり諸の
眼病を治すとぞ 昔いさるきの東施叢橋の小戸
にかへりて日毎湖をあらいて眼をそゝぎ玉ひしと
云湖のなごりにやの所ありしが湧出せし湯なり
へしとよし 羅山子が記にも見えたり 右蓮广湯も
此ひなしん

蓮广湯効験

ただれ目　逆上目　はやめ　そこひ
うかひ　同かすみ目　むし歯　舌瘡
口痺

ちと宿の話ニ此湯絶て不出 春彼岸のひより

断し涌かく仲麦の以盛之同国蛇子湯と字
も切と初め垂しくハ蛇子湯のことろといふハ
笛川かの事蹟 芦の湯より乾の方明星嶽山のふもと かし小さき石をさしていふ
は笛塚の事跡を糺し平かに白河院の御宇寛
治の比楽工豊原の時秋といふものあり時元か子さ
ていまた幼かりけれは時元ハ家の秘曲を源の義
光といふものに傳へ置かけれハ年経て奥羽の
乱おこりて陸奥守源義家胡地武衡家衡を
征伐しあふよし都まてきこへありけれハ義光
下向せんと申されけれとも兄胡家の御免し
かうむりて左兵衛尉を辞し陣に弦袋をかけて
えそかに郎等三騎を具し都を出て東方へ
下せ近江の国鏡の宿りに着ぬひけれハ花田の宰

将夜にあとを慕ひ来て門に入烏帽子したる若き男の源
をたつね来るかいかにやしと義光ハ殊に返りて尋ハ
時秋なりけりいかにとて向ひ来るハここかくの事ハ
さて何供仕候しと義光申しけれハ時秋なりひきかへし文を
志ハ給ハしとて義光か下向ハ故あれハ吾するはしりに
くり返し帰りの給ひ給ふとてさいはふ止めぬける讃
足柄山まで志ふひ来りけり義光馬をとめ是
柄の関にあるれハ吾昌ハ通しに難き事とて義光
こゝかしこのひのへら志ふてまいりまれ大の事而是
それの上子細傳ハれは一曲も残さすかけ申けり
ても通り侍りなんをこハヽ用なしととく帰り給へ
のちへとも思して着てハ時秋なし其時秋かう弦と
さゞりて馬より下りて楯を乞ひしかて時秋とと

在せしめ室穂より一紙の書をおくりて時元か書
しつる大食調入調曲の譜なり義光又笙ハ殊さらや
と向読へハ懐より取いたしかく慕ひ来りけるそ
おもてうけしとて時元が伝へし所の秘曲残りなく
教授したまふ此時こそ天津乙女も雲の通ひ
路をとゝまれ松風も静なることく心耳もすゝ
肝膽をめいしいと難有し時秋生前の望是れ
了連奉謝してまへこうべをかぶりなし浅や子思の
学ハ曾子の奉侍より出るとかや所り侍るハ君
と師父ともたのむところなり然浴して恩を謝さん
ことを祈りハ其志深く切なりされと義光かいはく
の下向ハ存亡知るへし若天運を顧て帰洛せハ再
音を移せんそこハ豊原家数代明家の楽工なり先

に於て身亡さハ伝長く世に絶んと又かけりしかハ
まゐらせよかし今はとて帰京して末代を期る忠孝の
事なるへしと再三とゝめたまへハ時秋もさすか黙し
て恩を謝し涙なからいとま乞ひ帰洛しけりされハ忠と
よりまさなる子舟木なる山の関伝へりしことを称と
まうしけり義光時秋の師弟の深情を追慕しけるさ
今於爰にしてはあしの湯此処て明尊山のほとりのこ
まされは追古人の此遺風をそこなひて古道の跡
あつらく古人にかはりて笛縁いしはよ実にいんたし
の名ハ梢もして百年の後に及ふ事ハ是を以て時秋か
つた処をみんなりとさたんして沐してけを述る
のこ
赤学

右紀河内玄紀 烟蘿化右斎 書

一芦の湯の上の山に樵跡権現を勧請し其下に畑
あり其辺まへに古しへの土肥の河内土肥畑なり
八雲御抄にあしからの湯とあるは是をいふとぞ此山乃
辺にあまた土肥の河内と同所にて此芦の湯の事
なるべし

万葉

あしからのとひの河内に出る湯の世にもたよらにころかいはなくに

口

あしからのわをかけ山のかつの木のわをかつさねもかつさかすとも

又同所樵跡権現の社地に東光庵とて薬師堂あり
東光庵の額ハ持明院宸筆とぞそこに加茂大人の
翁の自筆にてかゝまへる長歌短哥二首の
詠有り

加茂大人閑翁本姓ハ加茂縣主にて岡部衛士と称し
小字ハ三四と云濱松の人京師に出て大ひに古
学を唱へ国学を起とありして儒仏を詰るその
国学よりおこりや大ひに功ありとぞ

詠箱根山長歌短哥

あしからのはこねの山をあふきみれはこゝの大神のやさ
かまへをさためたましてよにかなりか葦名の御代も
いくたまひしちりやみ神のこゝろのまに/\と
こゝもちくのかれにくものへにひとたなへそむくけ
むこうへのせとさちなるに宿つのらかいふてよらふ
かれこゝをしもとろひかきたちかれにもろ御代
ふみしおひくる箱根山みちのゆの風そ称さひみちの

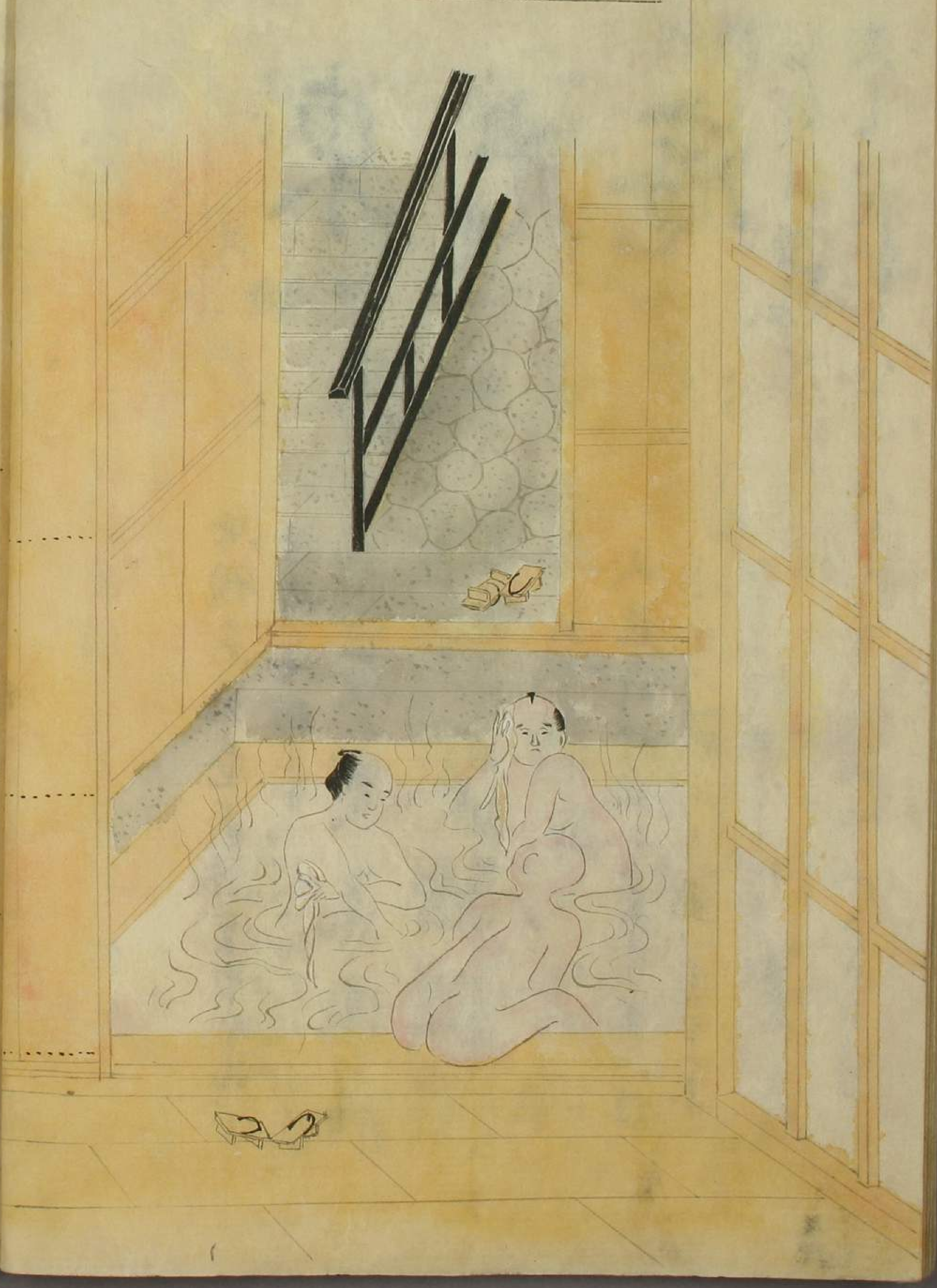
反歌

久かたの天はかすむとさしもさくらはねの山はつもりけしも
おそ桜をよめる　加茂季鷹
咲くれていりのまさかしくえ(?)かせり
いまぞ桜の花つもりかれ

東光菴裏不知暑雲脚
鋪庭涼似秋鷺鷥搭前
料来雨ゝ聲早在樹梢
頭
緑浮荘人

此額東光菴茶師書のまかりたる
持明院勅筆と以へともたしかなる
説を知らす額大ひさ中ゐ天狗庭
二天狗もあるへし全字を彫て
外縁に木地之かたちの紋らしき
ゆかれ
又熊野権現の堂ヶ英一蝶
若出の額あり画は廬生の夢
なり狩画いかし

底かし湯



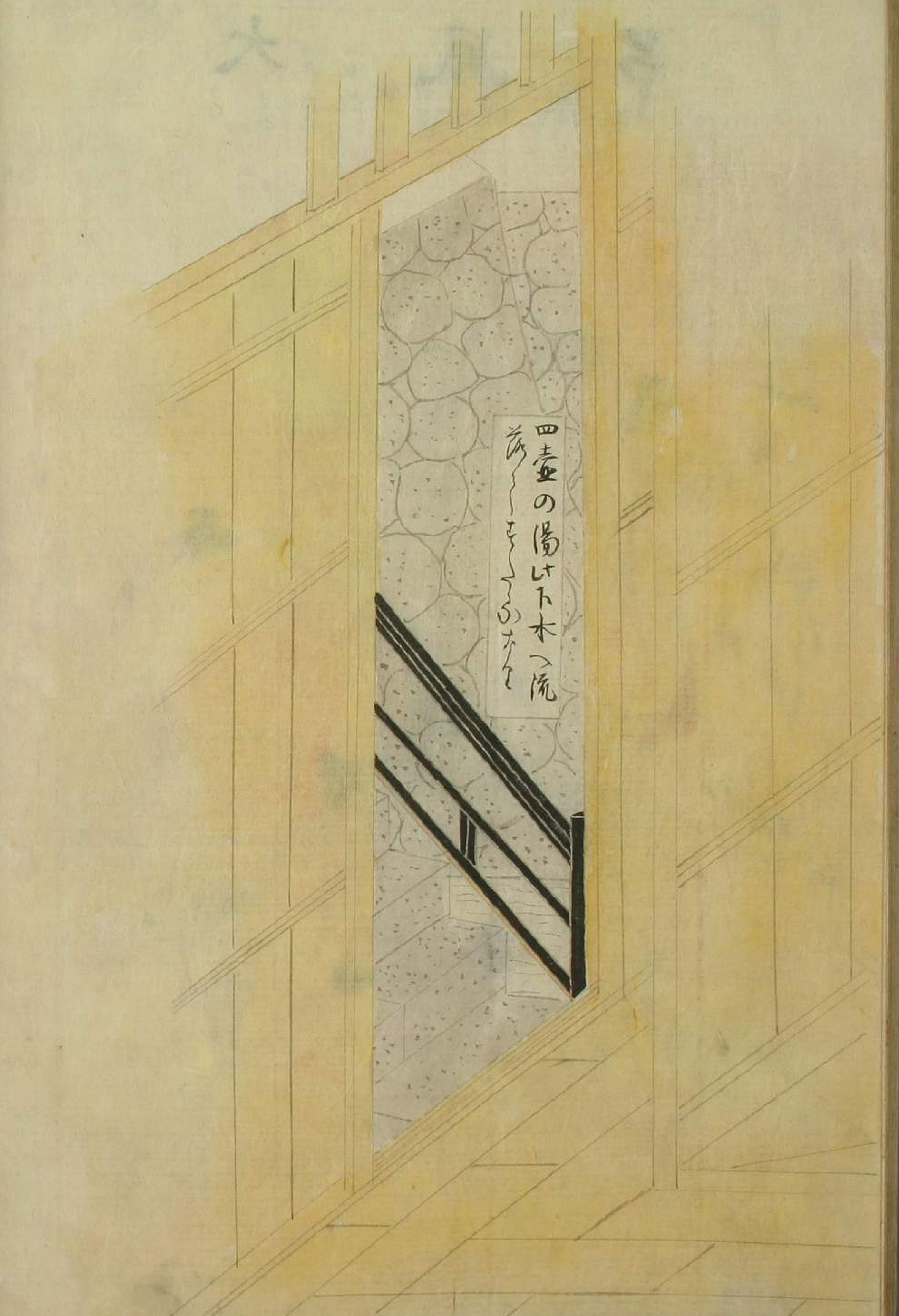
中の湯

大風呂

小風呂

但し菖蒲湯ノ時ハ卅所両口ニカケル

一此所の浴室ハ一棟にて四壺なり上ハと底なしとにして
底ハ石をたゝミ其間より湯涌出る温泉ぬるし 二ハ
中の湯とて湯口是よりてあつく湧ハ少し之を小風
呂とハ湯ふとくらくなりし此湯ありして四の大風呂
に板ひとへを隔て温泉流也毎ていつも但し図のことく
隔ハ樋口ハなり外湯に混り出水一滴もまじハず混
ミして日夜に流出ゑ打まさるゝ絶ハ釜中混ひせん
の形にて今もう浮候し或ハ手足被爛して行客不
自由なり病者此湯に来り浴すれハ膿清し膿汁
おそろしく自然と中より燥き治するのみなりその
故にや偏家のさひ儆癖に滞する妓女など来
て集り浴す也ハ風あしきを御ていそ の風流なる
まいらんかゝなし



一此地ハ谷深く志めり勝ちにて人家の住居なども
去まてめりふる事なし皆板羽目なり敷居いこゝろ強
ハそ乃痩き節ニおさえ火ハ棚に上げ壺こまくかく
湿地にて又湿を除く出湯あるゆへ寒さを
防ぎ湿を去る事もそれの理なるべし里民朝
夕此湯に浸る故にや此他にくらべ世にめづらしきの患ひを
あらし
一腫物の類膿潰していまだ吹切らざるハ湯風呂の樋口
へ往して雨をあてゝハ治まりて血ち口破れ膿汁
おもひよこの膿汁なとれ出ぬれバとて湯にて更なりともあ
ら只膿計ハの出安いよって別に湯の中より清水の如く
立湯にて有る御湯の様なるなし
一七湯目の本ハ年中療客不絶といへども去る春の末
より夏にかけて最もさかりにて此の湯客又冨士大山
の山もふでの両かけの湯めぐり杯とて六七月のころハ殊し
き繁昌なり其余の月ハ閑のこゝろなれハなるその室
素家の客なし殺多あらで当地にて
其外夢湯とて客のかゝり腫瘡の体むべき滞を
なす武ひハ撫りの細工石き事の強つくる事あんこ鉢種係
とかんつくり嗜ひ嘗く小量小田原の魚やつきよう
おの子達を通ずてしはふれつかつむもしく又
山家のすまひといひおりもつい淋し
又湯壷大風呂の方入口の破風に閑のこゝき額かゝ
まゝ有

樓真閣和卯

仙渓

日本國醫道之管領
従五位下半井大和守
磐梨別公景雲書

慶雲舘主

蘆の湯碑面標し

常に浴室に掛る所の額ハ
世学にして謙の額ハ湯君
の長さかりのけづりおろし
偏し御判あり是ハ古書の
うつしなり

一 芭蕉翁の碑　古肥山慈光権現の社地にあり方二尺五六寸の石也

山中や菊はたをらぬ湯のにほひ

一 芦湯新堤碑　同所にあり松山医官東都樹庵か文なり碑の背に

一 四方山人碑　同所にあり南畝蘆溪芦丘芦嵐の建る所高さ二尺
四尺巾の石なり

照月の遠をめぐりて桜花満もえし花もさけ

同所にあり碑表に詩あり裏ハ小山の文章
かれ其の形ちを彫て画ハ文鳳文ハ一武浩
高サ二尺巾一尺五寸石ハ寺井市兵衛詩ハ淡水忠

一 小山伝右碑

唐様高封仙桐桃母緑浅六人の作なり碑表
の詩ハ末に出ス

一 恩人碑

東光寺薬師堂にかゝる額乃岬の書子の句なり

芦の湯赤天山の頂にあり銘ハ両書き負
かくりのなし

山二山二子捨の如く需のもの

其角

大和屋居右衛の所持なり

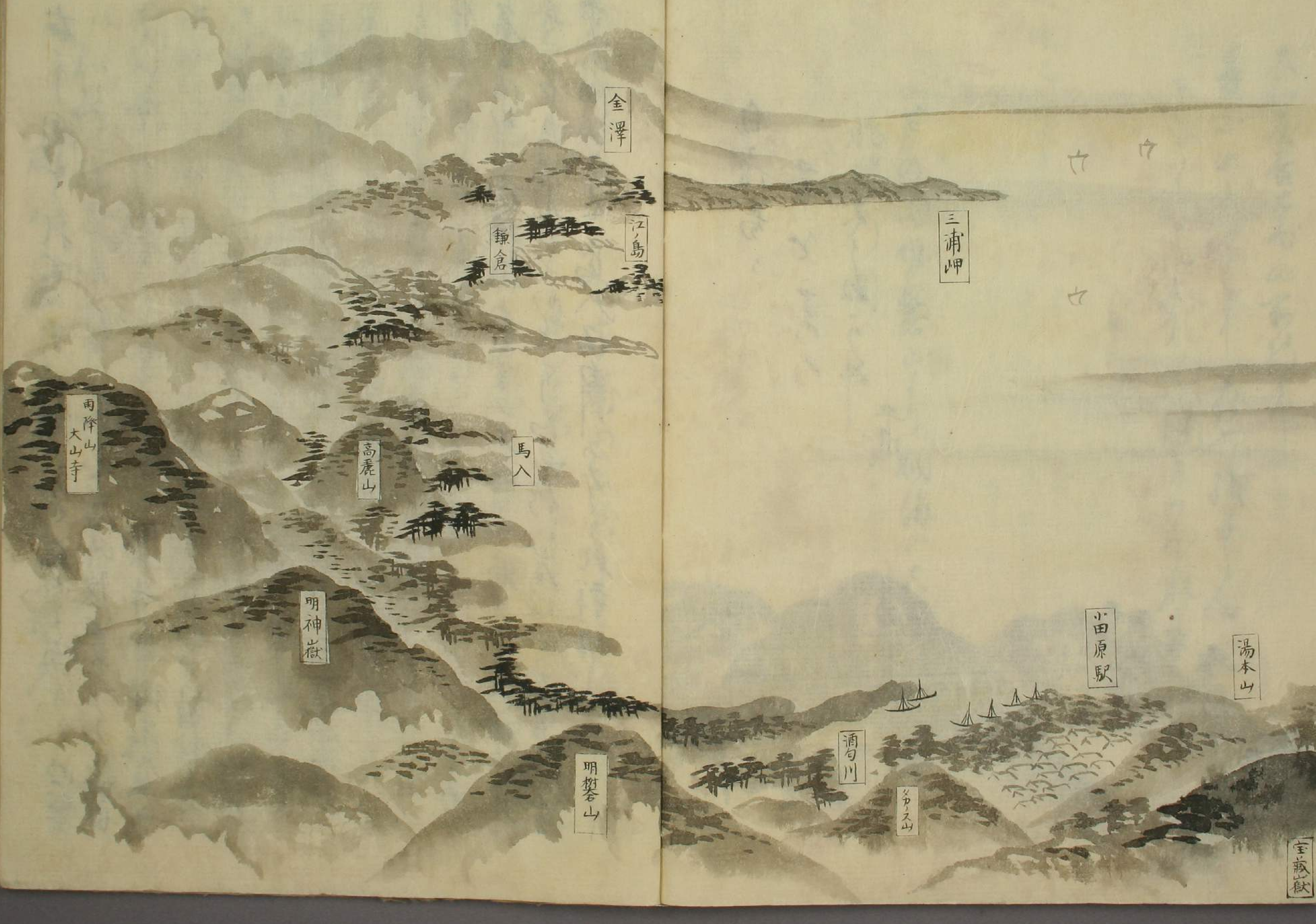
妻山のちりしく萩や錦しん
そこなきはしれく風そのかける

玉居

芦の湯明礬山より桐海の大洋
眺望の図

白居易ゟ
声とこゝろの
たゝぬこの秋

五凡


金澤
江ノ島
鎌倉
三浦岬
雨降山大山寺
高麗山
馬入
明神嶽
明礬山
酒匂川
小田原駅
湯本山
タカノス山
宝蔵嶽

右ハ図にしるす芦の湯にして西に向ひて此湯
山よりハ高山あり是ハ東光庵の下をめぐり阿弥陀
堂を過ぎ峠を登り凡十丁斗樹木なく
石山にて雑草茂の外蔓延ハ山の八分目から上
大石都つゞきなく鏡ひろかりより湯流れ出ぬ
此湯味あまり酸く清く明礬の気あり岩を
濁て明ざんにやあり此所ハ権現脇にて此湯の流を
ひたし更をとりきよく延ひたる物を出明ざんとこし
とりゐなり足下の小石ハ明ざん気ありともなく濃り
往く白く黄ハ出しんと変りり東南をながめハ
右のかたハ相模灘十七里の大洋一瞬千里の中ニあり
東ハ武蔵浦賀とかさぶり江の嶋ハ岸根を離れて空
中の浮のごとし 馬入酒匂川のながれ鮮明なるんしんし

只二筋の糸のやうに高麗山ハ大磯よりハ海のごとく
遠くハ大山をくハ箱の京をとりそびへや殊にかかえ
てその眺望申し言葉ふりがたしかりし所作も
此山の深ハえゆれ

湯宿主人の家蔵

重坂屋といふ湯宿よ所持る経冊織物の写し
桐州箱根山草の湯を箱根七湯の中もすて一の
名湯にて所の者たちたへひかしこの湯を
草ね来る人を君たる者を 杉坂屋となんいひて
繁栄なるびろしとりやら御を祝して歌よめ
とおもはれし
和哥以雅名湯何とてちんとてもよる人德　前中納言 持豊
旅ねの床ぞ 年りさうの比久

七十翁　松田言伯

箱根山あしの湯にゆあミせい
むかしハ人もかくへまかしん

又按すのは　八十翁　不白

山路草葉す

大和屋といへる湯宿に蔵せる按りのからりし
箱根山温泉ともある俳諧歌の長亭無友歌　四方真顔

あしのゆの箱根の山乃芦の湖乃あしの新湯のこ
くしゆ枝の芦の名にしおへるこれの温泉ハ芦の根の
古くとりしも芦のよの世に隠れなき芦垣のよしと

はへて芦のかの譯なれ共かりくさて何さ
ある人ハ難波の芦の志こつゆかしの病といひ中に芦
の芽の何をへるかへいさゝ近く漆けとさせ隠江の
芦ハ小舟行なるむ絶きあしのかゝ哉もし擢さし
めくる一回り二回りまて数寒き椿あゆ涼の方さゝくと
いかとこそ東け非うの迹さし志るしの獨悪しくて
志ら海辺り芦ハ花咲ある落へき難波女かかつくひち
かさ手取つさの何遍をさして一何日の末町へ秋ハ
かりしいかゝ也こひしりてかつかのや由ぬとい面
表立は言さし合ちて角くめる物のうさへの如り
のこ近るれ横非つりしともれてさつさこ寿しさの
いえぬをいゆしとたくの何かる病麦有又有さもよ
た成し玉れ扶ゆきれなれこともと便くとしして芦節の

芦峰とたゝへまかるひろかかる然れとも此山中に温
泉ハしも多けれとも岩乃水のさてよろしもこゝ
の名の芦の八重ふさ深もなく入来る人の多き是ハ様壮の
宿のあしたの志けさハ家も芦野のとまり穂て年
のさき遊ひ慶ぐれその中に抹門とよし宗とし川大
和屋ちかハ家とふ芦の近辺の春秋ハ花紅葉さへ
分けりあひ斎藤さへ隠あひ山路ハ於て風流士の
ふるさと府もいえぬ庵さか中しく
於もろりハれハ志る人の有馬まけかすまもあしも

これの芦乃湯

伊勢や清たる下駄の緒再り

ちることを知もしらし山桜

本店 宣長

ゆるて京海もおのいぬるの秋

旅人の好り句のむ一名なり　千蔭

其文三のはるかかしりしの山

又此地の桜大てんに日なりむぼとさうりとひ数り
はるき遊桜の添あり生世小田原の人とてよもか
おかりふのなるひとと似ぬ山さ也しハ　小田原 渓

としてし春のけ方いたつねより　桃李園

桜と夏のけのくこそそれ

右山のおくけさく違さんらん

日長さつりけむひ鶯丈かかまいひし　武蔵坊

峠まつれかなる山かけのむ

右肥山ハ速てる北山子の禅の字

涼気生時雨始収　淡齋 佐羽芳

遂風雲卿 玄如流

東南一角山寸鈇　展出蒼波萬頃穠
愚庵　木壽

為聽杜宇夢醒吹　起倚闌干夜欲分
最是蓬峯奇絶處　一峯吐月一峰雲
棧　榕宿泉亦翠巒

棧路欲傾桂翠蘿　行人樹杪踏雲過
名山如地奇書讀　妙處偏經險處多
詩佛　大窪行

山霧似煙還似雨　霏々漠々更紛々
須臾風起吹將去　太淋前山一半雲
綱飛　今川氏

鶯声和覺夢動回　爐底添香手自焙
小雨才收雲卿散　叢岸潑翠入江東

雲影乍昏還乍明　山村一日幾陰晴
霏微空翠涼如洗　滴作前檐踈雨声
緑陰　山本　謹

七湯の事ハ是まて述るといへとも毛段をつくすゆゑの
よしなき山の名所名物の品数をかのあんかいなき後
の二篇を添へてそ尾とこの書の人もうるはしく招
し給へ